

私は大学でアルツハイマー病の基礎研究をして  
いるが、科学研究のあり方が大きく変わってきて  
いることを痛感する。本来、「科学」は、純粹に  
興味・好奇心の充足を目的とする知的営みであ  
り、この知の挑戦はやがて、大学を場とした学問  
の自由という知の普遍性・善性に価値を置く20世  
紀的なエートスとして結実し、アインシュタイン  
や湯川秀樹などに代表される科学者は、社会から  
独特の地位を与えられていた。しかし一方で、こ  
うした科学の営みは、科学史家からは社会に対す  
る無責任体制と総括される一面をもっていた。つ  
まり知的情報や議論が専門家どうしの中で完結し  
（論文の Peer review = 査読制度、専門家集団内の議  
論・学会）、その成果の社会的影響には関知しな  
かったためである。

これに対し、20世紀半ばに新しいタイプの科学  
が出現した。「目的の達成のために研究費を出す」  
が、「請け負った研究者は結果を求められる」と  
いう契約型（使命達成型）の科学である。こうし  
た国家がクライアントとして主導する科学研究

## 基礎研究と開発研究—その現在と未来 道川 誠

（例…マンハッタン計画やNASAなど）では、その  
成果を見える形で社会還元することが求められ、  
時に研究者の純粹な興味や意識の変容をもたらす  
が、新しい科学は現在、大学や研究機関の隅々に  
まで浸透してきている。

古典的な科学は、知の普遍性と知の共有におけ  
る平等性を担保し、健全な懐疑主義により探求を  
続ける。しかし、新たな科学では、知の個別性（例  
えばアルツハイマー病研究）、知の独占性（特許の取  
得）、利害に基づく知の閉鎖性などの特徴をもち、  
古典的な科学とは、それぞれの価値で対をなす。  
状況の変化は、私たちの時代がすでに、科学研究  
による知の成果が国家の富を生み出す時代に入っ  
たこと、さらに科学研究の巨大化（巨額の研究費＝  
税金が必要）により納税者への成果還元が必要に  
なったことを意味する。ノーベル賞を求めよう  
な基礎研究と社会還元を目指す開発研究の、どの  
ような研究をどのタイミングで支援するか、クラ  
イアントの力量が問われる時代になったのである。

（みちかわ まこと／東洋哲学研究所委嘱研究員）